



岐蘇林

- 大正十年を迎へて
- 年頭の感
- 旅社木會植物目錄
- 林友改善に就て
- 波のまにまに
- 通信
- 北海道蘇門會の音信
- 日記帳より
- 會員異動
- 學校便り
- 謝恩金募集廣告
- 年賀
- 編輯室より

(日四十月六年四十四治明)
可認物便郵種三第

日五廿月每
行發期定

號五十三百第

日五廿月一年十正大

大正十年を迎へて

吾人悟性を縦横に走れば、悠久の憧憬は眼前に迫る。此憧憬は無限にして、過去に未來に、前に、後に、連續的に直覺せられん。茲明治の聖代を去る十年、其一年は一年と更新せられて、隆盛なる今日、豊饒昇る旭光に浴し、かの悠久の理想界を追及的しつゝ、回顧、大正九年は社會殆んど經濟の恐慌時代を出現、自然の戒飭は當然事となり、反省の機會を外的に與へられぬ。我校亦其數に洩れず、刺戟に勞れては安逸を希ひ安逸に厭きて刺戟を思ふとかや、二十年來の外的刺戟に内的反省に希望に、校風を一變して見るべきものあり。尙今後の改善は無限の憧憬に、先輩諸子の啓發に俟たのみ。かくて林友に對する希望は不平の聲となり、やがては大満足と轉換せらるゝなるべし。此轉換には大努力を切要とす。麻幾くは諸子此光榮ある轉期たらしめよ。須らく創造は現代社會の最大方針にして、世界を舞臺とし、人類を背景とせざる努力は總べて無意義たり。蘇水よ永遠に滔々の響を傳へよ。蘇門の輩般々たる丹心を末廣らかに發露せよ。

年頭の感

西澤生

改曆茲に大正十年の新春を迎ふ。吾人はこの希望に孕める新年を迎へて、我校友と

與に切に本年の多幸多福ならんことを祈つて止まざるなり。元旦に鶏鳴曉を報じ、東天紅を呈して、碧瑠璃の蒼穹、紫雲彩雲の間より般々乎として昇る初日出を仰ぐのとき、誰人も其の旭光の偉麗に感ずると共に毅然として意氣自ら緊張し、益々向上發展の念を起さぬものはなかるべからず。過去は經驗にして未來は實に希望なり、新年は洵に去歲の經驗を基準として新希望に向つて新しき發途に上らんとするの時期なり。さらば吾人はこの希望に歡喜とに満つる大正十年を迎ふると共に、希望に進むべく、須らく來るべき時代の趨勢を究明して、これに應ずる活動をなさんことを覺悟せざるべからず。夫れこの理想なく主義なくして徒らに世の風潮中に在りて、たゞ波と共に浮沈することのみにては、何ぞ其の活動の妙を極むること得べけんや。然らば吾人は新希望を有するともに、心を潤くし體を豊にして、時代の趨勢に伴ひて大に活躍し、以て國力の發展、文化の發達、國富の増進に寄與する所なかるべからず。

試みに我國の實業方面の事を観るに、今や歐洲に於ける大戰はその局を結び、講和後既に二年の歳月を経る今日は之れ實に實業的戰爭なり、武力的の戰爭に非ずして金力的の戰爭にして、この戰爭場裡に立ちて宇内に雄視せんと欲せば、須らく財力に富み百般の事業に精究せざるべからず、而かしてこの財力に富み百般の事業に精巧なら

しめんと欲せば、又須らく實業に長せざるべからず。こゝに於てか國家富強を以て顯はる、國は、皆其の實業の隆盛ならざるはなし、例へば實業の振興せざる支那朝鮮等は自動の活力を有せず、反之實業發達せる英、獨、米等の諸國は今や洋の東西を問はず、雷轟電撃の勢を振ひて世界に雄視しつゝ、あるにあらざるや。嗚呼實業の不振の國家の興亡隆替に關する亦大なりと謂ふべし夫れ一家一財を保障せんと欲せば、相當の注意を要すべきは勿論なるが、幾多の倉庫と幾多の壯大とを以て不虞に備へずんば可ならずや、况んや金融無缺の邦國をして永遠に其獨立体面を維持し、國威を宣揚せんと欲するに於てをや、國先づ之に備ふるに巨多の精兵を養ひ、幾多の兵器を貯へ、巨萬の財産を保持せざるべからず、而かしてこの精兵を養ひ兵器を貯ふるに於ても、其の國の富に依らざるはなし、又國の富強は國民の資産に外ならず。而して之の資産を生ずる原因を究めば正に之れ汝々汲々として實業を奮勵したる結果と謂はざるべからず、故に實業の不振は富強強兵の基たる事疎なり、然るに退いて五十有餘年餘乎として進みたる我國一般の狀勢を見れば實に長足の進歩なり、即ち明治、文學、法律等を始めとして教育衛生其他百般事業皆一新面目を見ると雖も、獨り實業の遅々として比較的未だ著しき進歩の實蹟を示さず、殊に林業に於てをや、豈慨嘆の至らざるや

如何に國の施設法律の善良なるも、一國の元氣となり神髓となる實業の發達を見ざる時は、恰も砂上に築ける樓閣と何ぞ異なる所なく、亦我國の林業の如きは今や建設の時代なり。然らば此の幼弱なる不振極まる林業をして、一轉興隆ならしむるは焦眉の急務ならんと思ふ。須らく林業に志する者の大に奮勵努力を要すべきなり。

あ、我校友よ、茲に大正十年を迎へ、心を新にし、意を鋭くすると同時に益々林業界の爲に勵み、自己の爲すべき責任を完ふし、聊か邦家のために貢獻せられんことを切望して止まざる次第なり。新年の劈頭に當て一言の所感を述ぶ。

旅

菊地



新年をば京都で迎ひました。梅は綻び、山椿や水仙が暖かきうに咲いて居ました。長又居た大江戸とは餘程感じか違ふやうでし。此馬は殆ど冬を悠々と歩き、頭の上に乗せて物賣にくる大原女や。大きい数々の寺や都外の低い山々等が始めての私にのんびりとした気分を與へてくれました。新京都の花やかな夜は淺草公園の賑やかさとは違つて美しく。比叡山の四明嶽の絶頂か

ら都と湖を見下ろした眺は天下の絶景で阪本に下りて舟中から見た湖は誠に洋々として全くの海の様でした。白雪の連山を背景に村の家が点々と散在して居る様は錦繪のやうでした。

私は京の本屋を覗き廻りましたが宗教上の本が非常に多いのに驚きました。町をぶらぶくと何處からか何時も念佛の聲がもれて来る。扱工教育と宗教とは蜜按の關係がある。大教育家は大宗教育家である事を思うと現今の學校では何等の形式でも少し宗教的でなければならぬではあるまいか。農林學校も見ましたがこれは京の北に在り引き移つたばかりでまた整へませんでした。併し農事試験所と一所である爲に害虫の飼育や農作物の培養試験等を生徒が直接に觀察し得るので非常に都合なさうです。すぐ隣には植物園である事も便利に違ひない。京には二十日餘り居て若狹の小濱に行きました。灣の眺の美しいのと魚の多いのが羨ましかつた水も滅法に張らぬさうな。近江の長濱には農林學校があります。汽車中へ生徒から學校の様を聞きました。歸路は岐阜農林學校を見る豫定でしたが時間の都合で充分に觀察する事が出来ませんでした。木曾は矢張り寒い。此頃は大抵零下八九度で駒ヶ嶽も御嶽も氷雪の大塊と化して仕舞うた。併し生徒諸君は寒氣にめげずは猛烈な寒稽古に元氣旺盛である。

林友改善に就て

桑 花 子

此二三年前の事だつたと思ふ、一時私と同級だつたM君や其他二三人の人々が、非常な熱心さを以て、林友の改善に就ての議論を本誌上に發表した事があつた、而しそれも二三ヶ月の間に過ぎなかつた、効果として上げる可き何もななく、現在林友は以前として其舊態を改める事なしに居る、折角其人達が叫んだ尊い言葉も、議論の爲めの議論として終はつた事を悲しむ、今またわたくしは此稿に依つて、林友の改善を訴へやうとして居るが、果して如何なる効果を收め得るであらうか、わたくしは本論に這入る前にこんな事を考へない譯に行かない、何故ならば斯くも熱心に叫ばれた林友改善の議論も、何の効果なしに葬られて終つたのみならず、林友を手にして通讀する人を未だかつて見ないからだ、大抵の人は卒業生の異動欄に一べつを與へるに過ぎない極端な人は人にどつた時もう反古か廣告同様に一べつだも與へないで葬り去つて顧みない、わたくしの一友人勿論卒業生はわたくしの所へ送つて来た林友を取つて、こんなものを何するんだ、と封のま、破いて捨て、また事がある、わたくしは總てが會員をこうだとは云ははい、而し余りに悲し經驗のみを持つて居るではないか、現在

木曾植物目録



- 薔薇科 ツチグリ、キジムシロ、ヤマブキ、キイチゴ、ボケ、ザイフリボク、エンレサウ、コデマリ、ヘビイチゴ、ノイバラ、ナ、タマド、ミヤマフユイチゴ、キンミヅヒキ、ワレモカウ
- 茄科 ハシリドコロ
- 金縷梅科 トサミヅキ
- 石竹科 ノミノサマリ、ワダサウ、ツメクサ、ミ、ナグサ、ハラナデシコ、フシダグロセンノウ
- 十字科 ナツナ、イヌナツナ、ミツタカラシ、タビラコ、コミヅタガラシ、ユリワサビ、イヌカラシ
- 金粟蘭科 フタリシヅカ、ヒトリシヅカ
- 百合科 シヤウジャウバカマ、カタクリ、ナルコユリ、チゴユリ、サルトリエイバラ、アマドコロ、マツバウド、キボシ、ヤブ
- 馬鞭草科 クサキ、カリカウサウ
- 雨久花科 コナギ
- 木通科 アケビ
- 遠志科 ヒメハギ
- 景天科 コモチマンネンダサ
- 虎耳草科 ノコノメ、ヤマチコノメ、スグリ、ウツギ、ノリウツギ、タマアヂサイ、トリア、シシヨウマ、ダイモンジサウ、ウメバチサウ
- 木犀科 レンゲウ、ワウバイ
- 馬兜鈴科 カンアフヒ
- 岩梅科 イワカンミ
- 忍冬科 ニハトコ、ヤブデマリ、ゴマキシロツメタサ、ハコネウツギ、スヒカヅラ、ガマズミ

(未完)

林友は卒業生の異動を會員に通知する所謂卒業生異動通知より他何の使命もないのだらうか、或は化粧品などの廣告より以上の使命を持たないだらうかと思ふ時甚だ心細い氣がするのは無理ない事だと思はれる、而してわたくしは一人でも眞面目に林友を讀んでくれる人があれば其爲めに此稿を此誌上で發表する事を躊躇しない、わたくしの此稿がほんの針の穴位に小さなものでもあつても、其が此稿の目的林友の改善に少しでも表はれてくれなと思ふ、衷心から林友の爲めを思ふからわたくしは先づ林友の使命が何處にあるか、の問題から出發したい、林友の目的が徹底しない時林友の改善も徹底なるを得ないからだ、これは一寸失禮な言葉かも知れないが、こんな事すら眞面目に考へて呉れる人が幾人あるだらうか、またこんな事を眞面目に考へると云ふのも或は無理な要求かも知れない、屹度そんな事を考へた處で何になると、頭から冷笑する人が多いだらうと思ふ、世の中の一友の使命に向つて、總ての連鎖をする唯一の機關だと斷定する、學校と卒業生、卒業生相互間、學校或は卒業生と社會、更に舊職員と學校、或は卒業生と云ふ様に、その連鎖は皆此林友によつて相互に知る事が出来るではないか、個人的關係はさうあらうとも、林友の使命も亦重大な意義ある事と思ふ、また或人は云ふかも知れない、其等を

知つた處で何にならうと、儘かに日常の生活に直接は必要は認められないに定まつて居ると、獨りで飯が喰へる様になつたから親の恩は忘れてもい、と云ふ様な論理が何處にあらうか、同じ校門をくゞつて同じ學業に勵んで来たお互同志は、其處に温かい友誼がなければならぬ、學校の模様を詳らかに聞き度くない人がまたと卒業生中にあらうか、友の情況を知り度くない人があるのだらうか、卒業生の實地研究や偽らざる世相の觀察や、生活の態度を學び度くない在校生があるだらうか、わたくしはどんな世の中にあつても、まだ人々の血は流れ程直に冷却されて居ない事を信じたい、事を信じて、林友の使命が其處に存する事を信じた時、一二の問題として林友に對する會員の態度を云はなければならぬ、現在の會員の態度は實に冷淡ではあるまいかと思ふ、これも全會員と云ふのではないが、一般的にさうだと斷定するに躊躇しない事だ、わたくしが今こう云ふ時、誰かが耳元にすれば内容は不充實だからだと云ふ者があるが、わたくしはそれに答へたい、何故に内容が不充實か、それは貴方がたが林友に對して斯くの如く冷淡だからだと、現在の如く林友の内容の不充實なのは、元々會員の林友に對する冷淡な態度がもたらした結果に他ならないと思ふ、殆んど學校

の林友雜誌部係りにのみ一任して、其處からのみ充實した記事を得やうとする事が當を得た變化があらう筈はない、此の記事を大した變化があらう筈はない、内容充實をして書く可き事も多くはない、内容充實を叫ぶ卒業生に於て始めて充實を計る事も出来るだらう、わたくしは會員に向つて、もつと母校を愛し、林友に對する態度を緊張しても貰ひたい事を衷心から願ひ度い、極端に云へば林友の改善發展の要は此處に存する事と思ふ、次には經費の問題だ、これも仲々林友改善に就ては重大な問題でなければならぬ、現在林友一部の出版費用はどの位か、其邊は判らないが其負擔は校友會費の一部分と、卒業生からの林友代によつて償はれてゐる事であらう林友の改善、それもい、が金がなくてはならぬ、わたくし達も學校時代林友に關係して一番心痛したのは此經費の問題だつた、經費の少ない場合は改善は到底覺えないであらう、また一部二錢や三錢の經費をもつて、内容の充實體裁等の整つた雜誌を得られやう筈はないのだ此場合特に私は一部の會員の人々に切に反省を促し度い、事をもつて居る現在はあるかどうか知らないが林友代を更に收めない人がたゞさんにあつた(私の學校當時に)斯る人々の心理状態がどんなものであらうか了解に苦しむ處だと思ふ若し現在にあつたとしたならば學校の係の人々から通知して徴收しなければ

ならない、まさか校友會員などになりたくはないんだと云ふ様な駄々をこねる人もあるまいと思はれる、若しあつたとしたら共に談するに足らないのだ、一夜花柳の巷に十金廿金を散する事はあつても僅かの而も尊い金を費ひ得ない者として寧ろ哀れを感じさせられる、其人の心情既にブアアなのだ、更に私は新たに提唱したい問題を持つて居る、一體總ての事業に就て一定の資本を有せなくてはならない事は誰れも首肯出來得る事でありながら林友の資本的財源の皆無なる事は根本に於て誤つて居る事ではない、此意味からして此際林友基本財産的の寄附を一般會員に仰いたらどうかと思ふ、現在會員の總人員はどの位あるか判然して居ないが一大宛一圓の寄附金を仰いても其額は多大のものとなるだらう、まして舊職員の方々や現職員の方々からは應分の寄附金を仰ぎ得られる、卒業生中にも此有爲なる企畫に對して十金二十金の寄附をなすに躊躇しない人々も多い事であらう、私は私の心から割出して此斷定下すに何等の疑をいれる事は出來ない、そして一回二回三回と回数を重ねた場合それは充分の基本財産となり林友の發刊に何等の支障なき事を保證する、幸に會員の人々が此企畫を賛して其著を此處に聞き度いものと希つて居る、次は林友の直接編集に従事して居る主任の方や部長其他の人々にもつともつと忠實ならん事を希望したい譯に行か

ない、其点を私達が林友を手にする度に痛切に感じさせられて居る、或は此反感が卒業生の一般が林友に目を注がない原因をなしておればしないか、中心人物の如何は大勢を如何様にも左右する、中心人物にして熱心であつたならば今私が此處に此稿を起して、一般校友會に訴ふるの必要もないだらう、暴言多謝、私は私の爲めに此苦言を此處に表明しては居ない誤つて居たら他日御教導を仰ぐ事とする、以上先づ林友改善の前提問題は斯くの通り、愈々林友其自身に對する改善に就てあるが是は却つて未葉の問題が適當に解決される時林友の改善は自ら解決される事だと思ふ、先づ其體裁であるが極めて拙いものだ、化粧品の廣告しよう、同じ經費に於ても少し何んとか改善の方法はあるだらう、自分一個の考として現在より小形なものとしたらどうかと思ふ、活字などもつと小さいもの、方が適當して居はしまいか、體裁は左程重要な問題でないやうなもの、體裁の讀者に與へる感化は其内容にも影響する事萬々であるの如何に先づ讀者の心をうばつて終ふ、内容の充實、次の此問題が今迄一番多くの人々に論じられて來て居る、林友の改善は内容の充實にありと云ふ様な調子で、全く其通りである、此問題は而し前にも云つた通り林友に對する會員の眞面目な態度が解決

してくれるだらう、林友の使命を知り母校を愛し校友に友誼を持つて居たならば現在の様に原稿の募集に汲々たる事もいらぬだらうと思ふ、記事は多くせんものが多いだらうか、それらは一々此處に列挙するの煩をさける、誰しもがやう／＼知つて居る筈だ、唯陳腐な専門的の事教科書を讀む様なものは避けたいものであるまいか、其等の事は別に使命をもつて居るものが多いからである、専門的の事も悪くはないが眞面目な研究的なもの新鮮なもの變つたもので始めて林友雜誌上に發表する價値が生れる林友は何處迄も校友會員の連鎖的使命をもつて居る以上學校記事卒業生及教職員の異動卒業生教職員の僞らざる世相の觀察、生活の態度等を發表する事が最も當を得た記事だらうと思ふ、文藝的のものも比較的讀み安い点から云ふつて、だらう、詩歌等は最も簡單で眞意を知る事が出来る最後に發刊回数であるが現は現在の通り是非一ヶ月一回の儘持續したいものだ、一年一回或は二回三回では林友の使命は充分に果されなない、他の校友雜誌と全然趣を異にして居る点は何處にあると思ふ、以上くゞくゞ書いて來た、乱筆乱文は元より致方ない、私の衷心がさせた徒らなものだ、唯校友諸賢の一瞥を仰いで衷心だけをくんで貰ひ度い、貴重な紙面を汚した事をお詫びする

波のまに

秋木淳一 生

▲平常は土曜も日曜も祭日もないブツ續けの忙しい生活に、せめて正月だけでも静かに送らうと、三十日の夕方自分の家に歸らず直ぐ停車場に足を向け、其夜の終列車で本市に出る、會ふ可き約束の人に、しかも久しぶりで會ひ、その夜はその町に二人語り更す

▲翌日再び汽車にてR温泉に下車す、D館の離れ座敷に、湯上りのホテツタ体を横たへた時初めて自分の体になつたやうにホツトする、こうして静かに獨り大正十年の新春を迎へる

相をつかす事が度々ある、こうして静かに平常の勞を休める事は、どんなに俺にとつて意義のある事だ

▲正月の虚禮の多い行事について一寸言つたがそれについて深く感ずる事は吾れ、の生活の改善である、殊に我が國は三千年來の舊套を全く脱し得ず、衣食の上に、住宅の上に、交際の上に、幾多の改善を要する点が枚擧に暇がない、物價の騰貴につれ生活の壓迫を蒙るやうになつてから、生活改善の聲が起つたやうであるけれども、それは一少部分の識者間に限られて居て、一般にまだその聲を聞かないのは甚だ残念の至りである、よろしく國民一致眞の自覺の託に、生活の改善に意を注いだならば、なんに便利と余裕を得る事だ、生活の改善といへば、直ぐは西洋風を連想し家も西洋造りにし、着物も洋服にしなければならぬと主張する人があるかも知れないが、俺れのいふ生活改善はそんなものではない、日本古來の住宅にも幾多の便益と、美点のある事は敢えて西洋の建物に劣らない、從て西洋風の建物にもいふの不便がある、着物にしてもその通り、故に我がものをし、て悉く彼のものに代らしむるといふ事は既に生活改善の趣味をはき違へて居るものである、要は我れの短を捨て、彼の長を取れば又彼我相比較してそこに新しい生命を見出せといふのである、然らばどういふ處が改善を要するかと云へば前にも云つた通り

なか、枚擧に暇がないが、中には自分一人て若しくは自分の家一家族で出来る事もあらうと、社會の人が皆一致してか、らねば出来ない点もあらう、不取敢私共は自分の手の届く番から改善の歩を進めねばなるまい

▲生活の改善で長々と書き續けたが一言も具體的の事には及んで居ないが、かく言ふ俺れは、俺れの生活の上に多少改善の實をあげて居るつもりだ、その事に就いては何れ又誌上で俺れの経験を發表する

▲二十有七年の過去を顧ると、下宿屋の新年、自炊生活の新年、伐木處の新年、兵營内の新年、山東半島は、ビスマーク砲臺下にて飯盒炊爨に迎へた野營の新年、昨年は此の母を連れて伊勢參宮、そうして今年此の淋びしい田舎の温泉宿に、吾が身一つの新年、思へば様々である、日本領土を股にかへ活動仕様とする俺達の生活は、今後とていふの新年を迎へる事だ、年毎に生活に已割を齎し、新年と共に氣を新しく活動仕様とするものは、新年を迎へる毎に特別の興味もある事だ、然し「日々」に氣を新らした」といふ信條を有する俺れには正月が來ても別に面目い事もない、むしろいろいろの虚禮にとらはれた行事に愛

るだけ石炭の代用物を利用するといふ事は吾人の當然勉むべき事柄である、その意味に於て俺れは鐵道の電化問題には徹頭徹尾賛成である、汽船とか軍艦といふものは時にやむを得ない、けれども鐵道だけはその動力を電氣に代へても、何等の差支へないのみならず、恐ろしく經濟的であるといふ一日も早く電化法の議會を通過して實施せられん事を希つて居る、そこで電氣を起す原動力は何に依るか云へば、日本の如き地勢の處では水力に依るのが一番いいのだといふ、そうするに今度は、吾れ、林業家に深い、交渉を有するといふ事になる、即ち水源の涵養といふ事である、水量の一定して居るといふ事は、水力の發電處を作るに最も大切な要素である事は、誰れにもわかりきつた事である、森林の存在と水量の調節もわかりきつた事柄である、うして水源涵養は吾れ、林業家の當然の務めである



通信

謹賀新年

大正十年一月元旦

北都春駒にて

北海道蘇門會

遙に蘇門二十週年の新年に際し茲に有志北海雪深き都に會し母校の前途益々健全なる發展を祝福しつ、万歳を唱へ木蘇式を發揮す會するもの本道在任の四分の一に不足と雖も吾人の微意ある處は茲に林友紙上を通じて報告仕候 敬具

西年や

廿歳迎へて

若返り

木會節詠ふ

雪の都に

昔思へば限り樂しき身を

小松吉次郎

祝

蘇校廿週年紀念

遙々と蝦夷が島にて

蘇門會

今日のよき日を祝ふらん

原愛浪生

松の内

蘇門は

雪にもめけせして

放野山人

嬉しい

雪の蘇門會

小林右内

美形のしやくに

前途を祝ふ

母校を祝福す

久保葉舟

祝大正十年の初春と昔に蘇門會の開催に、我蘇校二十週年とわたりぬこの二十週年をいかに迎ふ可きか茲に於てか本道在任諸賢の御賛同を得て海上遠志と云へば三十余海里の北海雪か風か雨かにさらされしと云ふゆゑが島の中樞に此

いかなながら四分の一に充たぬを遺憾とす

蘇門會

花の咲く様な

金玉の札幌すて、な

こんな池田で苦勞する

蘇門の門出に

キラカチヤカホイ 日生

六花 飛ぶ 生
 歌いさげや
 會門の賢よ
 今日は初と
 又來年も
 南二條東三丁目の人
 雪 深き
 北の都で
 蘇 門 會
 風吹重なる
 丁 生

北海道蘇門會の音信

久保葉舟生

春陽來復慶雲四海に滿つ
 併而蘇校の發揚を祈る
 本年は將に我校の創立二十週記念に當るや
 佳期を逸せず之に本道在任諸賢と相計り舊
 情を温むる可く茲に一月も二日と云ふを選
 び蘇門會の呱呱の聲を擧ぐるに至れるを以
 て聊か林友の紙末を穢さんとす
 此日恰も北海の特有たる吹雪は黒龍踊つて
 大吹雪となるも流石に木曾の秀麗の地に鍛
 えたる諸兄等腕車をかつて來會廳で安藤氏
 小松氏の來駕せられるや直ちに開會と相成
 り美形の待つに依り宴將に興に入り酣とな
 るや木曾踊と變じ其興たるや筆紙に盡し難
 きものありき「四五人も寄れば踊となる夜
 哉」最後は蘇校の方歳を一唱して午後九時

半閉會せり
 縁に 本會々長 前校長 安藤 時雄氏
 副會長 前教諭 小松吉次郎氏
 を推薦す
 贊會者は安藤會長、小松副會長、原治二、
 出雲秀二、内山伊那登、矢崎清海、小林右
 内、大木多喜雄、吉田正男、野口勇諸賢等
 十一名なり但し在任者四十名は余すと雖贊
 會者少きと贊否の通信なき兄等のあるは遺
 憾とす 終り

日記帖より

榎 舎

親子してまどるの炬燵朝清し初春祝ふ屠蘇
 の香に
 日の前に聖者の生を思ひつ、おろかひ心吾
 老になり
 大空に聲あり光あり日のみこしたひ我いそ
 しまん
 鶏の初音を我は聞き居たり我も歌はん聲を
 限りに
 雪どけの昨日を思はせ氷はる馬の足あと下
 駄の齒のあと
 吹雪すと裏山鳴りて薄暗く白き節引く楡林
 に
 朝戸出の寒きにくにの父かなし三十路にあ
 まる子は持ちながし
 片側の薄紫に片側の旭に光る雪深き丘
 鮮人の寄せ書など載せらる、林友かなと陸
 月終らんとす

會員異動

- 丸山林一君、豊橋歩兵第六十聯隊第四中隊第三班に入隊
- 田中泰吉君、北海道石狩南龍郡深川町帝林局出張所に轉任
- 原田義治君、北海道北見國野村牛町富士製紙會社に轉職
- 今井實太郎君、小縣郡九子村在住
- 和守守衛君、南安曇郡役所に轉任せらる
- 下條初太郎君、靜岡縣伊豆稻取町田町に轉任
- 赤羽高君、北海道苫前郡羽幌村帝林局札幌支局羽幌出張所に轉任
- 長谷川房藏君、關西大學に入學の由
- 高橋秀惣君、豊橋廿五聯隊四中隊へ編入替の由
- 後藤豊吉君、岐阜縣益田郡下呂村字森帝林局出張所に轉任

學校便り

十二月二十八日、本日の官報により西澤教諭陞して高等官六等を以て待遇せらる
 一日、本日前九時講堂に於て拜賀式を舉行す
 一月十四日、本校教諭兼舎監島内庸明先生本日を以て秋田縣立農林學校教諭に轉補せらる

一月二十日、冬期休業中他地方へ御旅行の諸先生は何れも本日前歸校せらる
 一月二十一日、本日前九時講堂に於て始業式舉行副部長長先生年頭の御訓示あり式後直ちに授業を開始す此日午後島内先生御榮轉の告別式を執行す
 一月二十三日、島内先生御出發につき諸先生並に生徒一同福島停車場に見送りをなし先生の御健康を祈る
 一月二十四日、中村教諭縣下中等學校教務主任研究會を長野縣廳内に開會につき右會へ出席せらる、本日より剣道柔道の寒稽古を開始し修養團山林支部各位の奮闘と相待て元氣校内に溢る

謝恩金募集廣告

拜啓嚴寒の折柄各位益々御清穆の段奉慶賀候 陳者永年當校教諭並に舎監として御盡瘁下されたる島内先生には今回秋田縣立農林學校へ御轉任相成候に付此の際謝恩金を呈して聊先生の勞に酬ひたしと存じ候間左記御了承の上何分の御寄贈に預り度此の段得貴意候也
 一 振替にて御送金の場合には東京一七六〇〇番木曾山林學校宛のこと
 一 爲替にて御送金の場合には木曾山林學校内藏尾真宛のこと
 一 締切期日は來る三月二十日限りのこと
 一 領收證書は一々不差上誌上に御報告可申候也

大正十年一月、校友會 卒業生各位

謹賀新年
 併而新年勿々賀狀を賜はりたる諸兄に對し茲に厚く御禮申上候
 大正十年一月
 長野縣木曾山林學校 同 校友會

- | | | | |
|-------------------------------------|------|-------|--------|
| 學校又は校友會宛年賀狀を辱うしたる各位の芳名を左に列記し茲に謝意を表す | 長崎信一 | 山崎 高男 | 山梨縣蘇峽會 |
| | 大脇又衛 | 吉田 兵太 | 竹内房太郎 |
| | 中越三郎 | 原田久津作 | 米久保春雄 |
| | 中島要人 | 喜多村 勇 | 武居喜太郎 |
| | 宮澤嘉一 | 青木 忠太 | 加藤源一郎 |
| | 金澤建雄 | 今井 澄水 | 丸山嘉一郎 |
| | 長谷川毅 | 木村 康明 | 宮澤 末雄 |
| | 藤原幾喜 | 大森 久次 | 加藤 純一 |
| | 兒野 榮 | 竹村 節三 | 脇田 義正 |
| | 木下武夫 | 伊藤正之助 | 井戸金五郎 |
| | 松澤万吉 | 上田 鉛二 | 田近差右工門 |
| | 樋田 颯 | 伊藤 善三 | 仲俣 五郎 |
| | 原 英雄 | 河野 長六 | 倉科保一郎 |
| | 荻原惠治 | 田中 榮一 | 關 佐一郎 |
| | 遠藤宗作 | 東原 智 | 安江安太郎 |
| | 塚本三男 | 原 正造 | 鍋島梅太郎 |
| | 大脇又衛 | 小澤 安親 | 宮森太一郎 |

- | | | |
|------|-------|--------|
| 田中 一 | 村松 一郎 | 服部敬太郎 |
| 古畑 豊 | 長崎 信一 | 長崎 千万 |
| 山内彌太 | 小崎 次郎 | 遠藤治一郎 |
| 水上壯三 | 山下 藤一 | 島田勘四郎 |
| 宮澤 功 | 佐藤 二郎 | 兒玉 良人 |
| 山村克人 | 丸山 久雄 | 富士川鏡一 |
| 中田 權 | 草間 勝 | 福田友次郎 |
| 宮川永三 | 有賀 正一 | 都竹武次郎 |
| 乙谷耕吉 | 川崎 本雄 | 上條嘉一郎 |
| 松本清太 | 福川 正三 | 塚田繁次郎 |
| 岩井淨治 | 片桐 壽吉 | 宮澤 嘉一 |
| 中村五郎 | 小林 哲三 | 江崎熊太郎 |
| 岡西万秋 | 徳武 國久 | 長谷部真一 |
| 青山 泉 | 藤枝 武林 | 月田喜代佐 |
| 松原松男 | 大茂 國男 | 富士川金二 |
| 大森 悦 | 紺田 孝三 | 松館藤太郎 |
| 矢島 穰 | 岡西 謙三 | 藤澤甲子十 |
| 宮田 實 | 加藤 七藏 | 千村彌之助 |
| 松島周一 | 吉田 武男 | 霞上正二郎 |
| 高木榮一 | 大島 晃治 | 古畑今朝藏 |
| 加藤浪男 | 岡戸 房治 | 小羽根安次 |
| 山崎茂作 | 下平 佐門 | 川岸滋次郎 |
| 赤羽三郎 | 近藤 幸吉 | 山藤作四郎 |
| 桃井武男 | 市川 豊二 | 今井與一郎 |
| 古澤久治 | 藤卷 壽一 | 本多清右工門 |
| 伊藤 厚 | 伊藤 義男 | 一之瀬製袋壽 |
| 森戸吾良 | 矢島 駒二 | 代田文之助 |
| 小橋要作 | 尾重 清 | 伊佐治彌兵衛 |
| 山村次一 | 平田 稻男 | 千葉清五郎 |
| 原 七郎 | 荻野 利雄 | 野村 光智 |

友林蘇岐

原彌藏	下平通雄	原正次	河野長六	藤田要吾	喜多村弘	島澤義男	市岡正茂	今野啓藏
丹澤潔	波羅友治	松澤莊太郎	佐藤光造	野本美嘉	米久保春雄	石坂季治	直井利雄	金子平雄
安藤時雄	峰村歳未	成瀬義郎	新家園面	鷹見勳	等々力與八	關谷静夫	柳澤義雄	加藤朝太郎
杉本貢	原田義治	村上安太郎	松澤萬吉	原川只一	山下藤一	加藤浪男	篠原將英	肥田幸一郎
原山益善	佐塚甲子	石倉根四郎	新田穰	森次潔	古畑要司	伊藤傳	吉村孝助	坪倉藤三郎
岡山益善	小松雄二	久保田傳一郎	加藤清一	和田宗吉	志津篤助	後藤豊吉	向井性晨	小松義三
大坪時治	岡西猛	野尻萬次郎	征矢三郎	由尾忠助	高橋秀惣	中田辰雄	寺島正治	山下不二三
原榮多	小池常三	坂本光太郎	河島憲一	千村萬三	高野金作	池田仲治	青木重俊	原金五郎
大脇重文	岡田廣平	長谷川史郎	各務傳六	中川源太	北川春	小林秀一	塚田大	宮下正三郎
温井誠一	二木季人	木村晋次郎	原田義治	加藤正次	和田實也	水橋要作	塚田大	宮下正三郎
後藤豊岩	岡野琴義	吉池吉九郎	今井武男	佐藤一郎	古畑七三	小林哲三	佐藤鎮守	井上新次郎
宮島岩見	岡野直三	内山伊那登	仲谷馨	藤田喜一	篠原忠治	丸山音吉	高野薫見	畑江七兵衛
今井忠雄	中吉基一	米山太郎吉	前田正義	藤田喜一	勅使河野角藏	今井真二	吉田正男	長谷部真一
米山修	日野樓亮	倉科浦一郎	兒玉良人	乙谷耕吉	吉田佐十郎	柘植五郎	安藤清吉	宮澤惠喜太
前田悅作	山崎兵平	小池金三郎	志津幸雄	千村重喜	宇佐英周柴	深美佐愛	伊藤喜代	山羽根安郎
山崎次郎	木村康明	小岩井茂樹	瀧美雄	柳澤虎三	岡田彌兵衛	白木喜雄	山村次一	北村竹太郎
武久貞一	土肥俊	山中三十四	松島良二	小松精内	今井實太郎	原七郎	森次一	加茂憲太郎
河野滋	永田泉	八木愿藏	原恒	丸山林一	遠藤治一郎	波羅友治	平田稻男	柏澤正之進
小國正一	住谷貞雄	三原忠一	野澤博	藏田毅郎	佐藤誠一	原彌藏	唐澤俊文	植澤英一
井上寛一	吉田精一郎	塚本三樹	瀨在實	坂卷利一	今井澄水	甲田林	原俊	中村豊治
赤羽高	大城朝詮	原曾根四郎	原四郎	丸山久雄	長谷川義男	安藤時雄	森正次	松澤敏男
星賀正雄	太田由市	安井元吉	村山道信	木下旭	福田友次郎	伊藤厚	中畑佐耕	山岸七之丞
倉澤建雄	永井順	加藤吉郎	赤羽末吉	深英利一	横山治人	松島九平	輪湖正由	廳澤忠治
山本茂	米倉巧	坂田勲太郎	菊地貞次	梅村計介	安江悦次郎	近森良材	柳澤得衛	代田文之助
樋田良市	吉田良恵	内田新之助	可兒敏郎	森戸吾良	澤田富可	七宮純雄	横井正守	等々力爲一
松原大造	田中榮一	市岡淳一郎	川合清行	中垣英一	高橋作治	福井利吉	森下義郎	喜多村明
種倉隨藏	中澤楊	柴田勲十郎	吉澤英雄	木村英一	野本與一	杉本貢	野村光智	植川金二
遠山虎雄	山崎多内	丸山嘉一郎				柳澤久一	和田守衛	木村鐵二郎
小林盛大	渡邊知則	恩田司馬之助				岡庭泰國	星重男	柳原武重
田中吟重	皆川秀雄	武居嘉太郎				安藤次郎	福山也	早川一雄

友林蘇岐

辻敬三	曾我義郎	奥原吉右工門
林森	阿部益實	宮入汎者
水野宏	小植二郎	花村隼則
松原松男	原喜四三	竹内房太郎
山下常記	小野球治	細窪友一郎
萩原爲一	村松一清	月田喜代佐
松尾廣二	征矢林郎	唐澤繁夫
水上久	宮川永三	小林敏三郎
三木季人	原治二	佐々木久一
山崎三男	平出耕一	和田常次郎
須田順吉	宮澤孝	野見山定雄
宮澤修	鈴木繁	内山伊那登
久保照人	今井鈴	上田彌太郎
不免修六	出雲秀一	平田久良治
黒岩正平	西村清志	安江明耕
松川久吉	小松良輔	唐澤清見
齋藤正男	長田	伊藤芳郎
古根是	林能郎	小池茂樹
柳澤重次	小林右内	小林桂一郎
柳澤邦信	鈴木正雄	吉田精一郎
岩久守治	米山芳郎	糸魚川良二
林勘治	永井武治	吉澤豊一
北原傳根	杉山倉澤	

編輝室より

田中

新年には諸兄より多数御丁寧なる賀状給は
り誠に有難く、室員一同に代り御禮申上げ
ます、多忙御返事も出し兼ねましたが、諸
兄の上に更によき日の来らんことを遙に蘇
水に臨む一窓を打開し祈つて居りました此

欄を借り一言御挨拶致します。
扱社会には衣服の流行と同様に思想上にも
不測何かの流行がある。尤の話で衣服洋服
髪飾は有形の思想で、思想は無形の衣裳で
ある。其の新新奇抜を愛好し舊態を倦怠す
るの所に、流行の心理は示現するものであ
る。かくて何等か當代人士の思想嗜好を發
露し、其趣味を語り、其歸趨を告げて居る
けれども其顔面の同輪であるか、長方形で
あるか、或は色艶の好いか、地肌の黒いか
白いか、將又身長の高いか短か、肥かによ
つて如何程流行の縞柄であつても似合ふ人
と不調和の人とがある如く、縦善く調和し
たとしても大き過ぎたり、小さ過ぎたり
しては無恰好だ。それで各自の身に適當し
た様に製作して始めて妥當立派に見栄わが
する。思想問題も同様と思ふ。無暗に斬新
な主張主義だ、有名なる言説だのを見聞し
て直に信頼し之れを言説すると、案外變挺
子なものとなるので、引いては世の笑物と
なる。近來〇〇主義新〇〇主義改造と云ふ
が仲々流行する。それを直ちに依信して叫
號する。改造は至極結構で賛同の方々が數
多あると思ふ何と輝かしい言葉、余全自身
も雙手を擧げて賛成する。が世の中には其
新式園氣に生長養成もせられず、其事項を
何等講究した事もなく、只聴聞したのみで
改造の言葉が新しい、意味がよいとばかり
に心引かれて縦想を縦意に主唱するので、
されば如何にしたらよいと尋問せられては

夢アと云つたり返事が出来なく具體的皆
考案がないなど、云ふのでは寧ろ滑稽に感
じられる。新施設新主義の中に生長して新
主張をなし改造気分の中に入出したる者が
唱導するなら、尤もらしく聞かれるが、譬
へば丁髷の中に生長し、徹頭徹尾丁髷であ
りながら口には改造を説くと云ふに至つて
は笑止千萬と云ふべき様なものである。尤
も丁髷の人は當代は皆無と信じて居る。そ
れで丁髷であつたら其丁髷を切取る様に
今日の状態を一層よき方へよき方へと導き
たい考で常に努力し向上發展を期す次第忠
言苦言は多々頂戴したいのです。付いては
室員の出來得る限り御意志に添はんものと
決意専心努力しつゝ、おる昨冬盛岡在住の卒
業生一同よりの御音使に「常に懐舊の情を
奮湧する林友が此頃遅刻する未だ〇〇月分
が到着しない、原稿がないのか……」は一
寸皮肉の感が十分で椰榆的であつた。御本
人は其様な御意のないのは余自身更に萬々
承知して居る。が其れ位見え透いた事柄な
ら其御音信の序に原稿御送附に與りたい。
前號にて編輯子が病床にありての故か大部
ヒステリカルに毒付いた様に思ふ。あれも
其日の出來心と御寛恕を乞ふ。誠心誠意自
分の意中を打明けて其ベストを採用する方
針を取つて居るのであるで林友は紙質が悪
く装禰も見映えがない貧弱極まる他の學校
の校友會誌等と比較して見窄らしい一寸と
手にしても讀む氣になれぬと云はれますが

それは一種の時代思想で、紙質が良ければ内容が錦言寸金の價値がある様に思はれるが、外形如何よりは内容の充實如何を見て戴きたい。我が林友も此四、五年前の一種作文練習のものに比較並視せば多大の進歩を示して居るものと思ふ。それに此林友は三種郵便物で月刊物たるを失念なき様に願いたい。且經費の如きも一部三錢にて済すのだから紙質改善には一ケ年に多大なる費用となり、其出所の無之を如何せん、縦令ありとても其必要なし。内容の点は在來諸先生の御高説を仰ぎ何ぞ社會の爲諸氏の爲と思つて心盡しを極め居る次第、これにても不適當なりとし、名士の新高説を買受するに至る外途なしとする。付いて原稿料一枚に對し金五圓以下のものなく、京都の〇〇博士など金參拾圓と云ふ高價を算するに至つて居る。實際其意見も余は持つて見たので、當つ粉塵した譯である。一枚金五圓の原稿料を支拂ふとすれば二ヶ月分に二百五十圓、一ケ年三千圓以上の料金を準備しなければならぬ。其多額を見て眼の玉を廻すばかり、其處で廿週年記念として多少なりとも林友に對して基本金式のもの欲するが、之れは無理な問題ですが、諸子の御同情に懇へたい考へです。して菊地先生は御明辯御賢筆を振はれて御熱心に博物標本蒐集に努力せられて居るが記念事業とし

て誠に結構な事で諸子の御援助を多々希望します。これとて一方に偏するのは甚だ面目からの結果となればすまいかと思ふ。それに本來が天下廣しと雖も日本國中に唯一の山林學校である。其學校の本領を發揮する点に着眼せられん事を望む。付て其方法等も多々なりと雖も山林事業に關する器具の完備にある。以て今後の生徒諸子をして十分なる學識を得て世のスタートを切る様にと、老婆心を持つのだ。譬へばトランシットなど九臺しかない。五十人程の生徒が之れに取摺まるのは話にもならぬ。此九臺も破損まで入れてある、學校の費用は之れが修繕しか廻らぬ。且大正九年度よりは二學級制度の八十名乃至百名の生徒を収養する方針であるから、百名の生徒九臺に摺まると思はれば滑稽の極と思ふ。依つて學校にも其考はあると思はれるが其不足補充する様にした。パーニャーコンパスの如きは一箇もない、文明の利器で學校として此様な物がある位は見えて置かねばならぬ。又製炭業等も籠を見ると甚だ貧弱の感がある。参考の爲に左に諸器械の一覽表らしい物を掲載する、諸子奮發一番我學校發展に資されんことを。

見取圖板	五	諸戸式圖板	四
丁形定規	二	雲形定規	六
三角定規	六	撓定規	一
自在定規	二	見透定規	一〇
縮尺組	一	竹製縮尺	二〇
曲尺	五	計算尺	一
輪尺	九	タ、ラ式輪尺	一五
中堀式輪尺	五	布製卷尺	一六
銅製卷尺	一	間繩	九
測鎖	四	箱尺	四
測桿	三〇	垂直桿	一
フアストマン測高器	三	ボーゼ測高器	二
高低測量器	一	クリステン測高器	五
ワイゼ測量器	六	ワインケレル測高器	一
クリノメートル	八	全木製	一
アンドロメートル	一	ホケットコンパス	八
ブリスマチツタコンパス	一	和製簡測器	三
トランシットセオドライド	一	一片パーニャ	二
玉屋乙式トランシット	一	全甲式	一
米式全	一	バンドレベル	一
直角鏡	一	圖引器	一
ブラニメートル	三	アチロイドメートル	二
キシロメートル	一	バンドグラフ	一
正方儀	一	スプリングニンパス	一
丸形磁石	五	テクリナトワール	九
歩數計	一	曲線烏口	二
鳥口	一〇	双頭烏口	一
点線烏口	二	曲線雙頭烏口	一
太線式烏口	二	文鎖	一
錘鉛叉	二	中チール	一
	上		

大正十年一月廿三日印刷
大正十年一月廿五日發行

長野縣西筑摩郡島田町四〇四番地 正 夫
長野縣松本市小柳町八十五番地 吉 藏
長野縣西筑摩郡島田町三八九番地 正 夫
長野縣松本市小柳町八十五番地 吉 藏
長野縣西筑摩郡島田町三八九番地 正 夫
長野縣松本市小柳町八十五番地 吉 藏

【定價金參錢】